

詩を書こう

担当講師 川口 晴美（詩人）

父と歩いた長い道

殿岡 秀秋

のだ

朝

布団に隠れていたのが見つかって

父に連れられて

小学校へ向う

始業時間はとうに過ぎている

舗装路が薄曇りに

無表情に拡がっているのを

ただ見つめて

口もぎかずに

歩いた

長い道

ぼくは

父が怒っていると思っていた

しかし父は

学校嫌いの息子のことを考えていた

日比谷公園で機動隊に逮捕された
十三日も留置所において

夕方突然警官から名前を呼ばれた

迎えにきた父と一緒に

警察署をでる

もう暗かった

中にいる間に考えすぎて

時間も空間もつかめなくなっている

父の歩く方向についていく

でこぼこしていないのに

歩きづらい

道が揺れている

駅の地下道にはいると

壁が近よってくる気がして

間隔がうまくつかめない

何とか平衡を保って

父の後をおって歩く
無言で
家に帰った

母が茶断ちをして待っていた

定年間際の父は

簿記の勉強を通信教育で始めていた

が

逮捕の連絡があった日から止めてし

まったと

母が語った

父は新聞記者として

社会の中立的立場に立つと語り

定年近くまで無事に勤めてきたが

茶の間では社会の批判をよくしてい

た

もしかしてそれが

行き過ぎた息子の行動につながった

のかと

父は歩きながら考えていたのかもしれない

本当は学生運動を止めてほしいが

普段言っていることと矛盾しないか

と

若い息子に反論されそうで

夕暮れの暗い道を

父は黙って歩くほかはなかったのだ
ろう

そのときぼくは

地獄の入口から引き返せた

安心感と

まだ残っている緊張感とで

糸がからまつた

凧のようにゆれていた

ただ

父から離れないように

ついていくだけで

何も考えることができなかつた

短い距離を歩いただけなのに

とても遠くて長い道

父と歩いた道

未知の人

殿岡 秀秋

異星人の女

ぼくより背が高い

コトバをしゃべる

ぼくを見て笑顔を作る

食事にさそう

女はよく食べる

ベッドに行く

ちやんと乳房がある

触ると反応する

「チキュウジンニ

ニテイルワネ

ドコノホシカラキタノ」

と女に尋ねられる

ぼくはぼくの星を指さす

お化け屋敷

殿岡 秀秋

仕掛けではなくて

普通のオフィスである

優しい表情でいた男が

背中を向けて振り返ると

窓の方を向いて

皮膚が蒼白くなり

眼が鋭く光る

その顔を見た途端に

心臓に短刀が刺さる

逃げ出しても

次の部屋には

落とし穴が待つ

底に落ちたぼくを笑う

男達の水玉のネクタイ

眠れた朝の印象

殿岡 秀秋

夜眠れそうもない予感

黄色い蝶々の形をした

眠りの精が天井の隅にいて

ぼくを見下ろしている

疲れた臉が緞帳のようにおりると

蝶々はぼくの意識をさらっていくが

運命のように重くて

袋小路に咲く花

殿岡 秀秋

ベッドに落としてしまふ
ぼくは反動で目をあける
それを何度も繰り返す

もうどうでもいいや

朝まで起きていることにしよう

少しでも疲れをとるために

じつとしていよう

そうおもったら

いつのまにか寝入っていた

カーテンの隙間を通る

光が細かい塵に当たり

銀色の筋になつて

その先にある風景を照らす

道に迷つてさまよい

思いがけないところで

知っている街角に

出たような

諦めかけた探し物が

部屋の片隅に不意に

現れたような

懐かしい声に振り返ると

君がそこにいるような

狭い二またの路地の

一方を歩く

袋小路だった

道を戻る

時間を無駄にした

往つて戻つた時間は

本当に無駄だったのだろうか

袋小路の突き当たりで

強い香りに振り返つた

箱庭なのか

と思うような小さな庭に

花萼の白い花が一本

首をかしげて立つ

星形の花びらの

中央に黄色いめしべ

花びらは校章の形

ゆらりゆらりと揺れる

細い茎の背後から

白い制服の

長い髪の毛

やせた少女が現れてくる

廊下を歩いてくる少女の目と

青い制服のぼくの目とが合つた

ぼくは言葉を出すこともなく

うなずいた

ただそれだけなのに

心臓をどきどきさせながら

少女の傍らをとおりすぎて

廊下を曲がつて

長い廊下をはしつて

校舎の裏に出て

かるいめまいを感じたときに

花壇から強い香りの

花萼がぼくを呼んだ

そのときの血の巡りから

情動まで蘇えり

袋小路の出口で

しばらく立ち尽くす

朝の街路樹

殿岡 秀秋

思わぬ方角から飛んでくる
ボールのように
不幸は突然
ぼくに当たる

視界が狭くなり
周りが暗くなつて
倒れるときに
歪んでいくぼくの顔が見える

しばらくしてもうひとりのぼくが
起きあがり

朝の地平線に
白い靄が湧くのを見る

街路樹の枝が腕のように伸びて
歩きだすぼくの行く手をさえぎる
ヒノキの枝が蛇のように
からだをからめ獲つていく

両手を振り上げる

葉をむしつたり
小枝を折つたりすると
枝がほどけてゆく

ヒノキの葉に
銀色に光りながら
米粒くらいの小人たちが
種のように並ぶ

手で枝を払うと
小人たちはいつせいに跳ねて
目の前でくるつとまわつて
ぼくの口や鼻から身体にはいつてい
く

からだの中を小人たちが
運動会のように走りまわる
ぼくがスキップしながら口をあける
と

小人たちは飛びでていく
地平線に頭をだした朝陽の上を
小人たちは歌いながら
駆けあがつていく

ぼくも後をついて昇っていく
倒れていたぼくは立ちあがり
口元が緩むのを感じながら
足を交互に動かして
街路樹の間をゆつくり歩きだす

メールより電話がいい

殿岡 秀秋

ぼくの声を
受けとめて
返してくる
きみの息づかいが
ぼくの耳のカタツムリに届き
回転滑り台をおりて
胸にまでくると
安心する

迷うことがあると
きみに電話で話す
話すだけで何も
解決するわけではない

きみの声は
柔らかく光る糸で
胸におりて
落下受けのネットを織つていく
ぼくのころは
そこで赤ん坊のように揺られる

何もないのに

殿岡 秀秋

何もない
やるべきことが何もない
ぼんやり庭を見ている
小学校入学前で
幼稚園に通っていないぼくは
兄たちが学校に行つていて
遊び相手がいなくて
やるべきことが何もない
ぼんやりしている視線の先に
見えているのは庭
竹が生えている

笹の葉がある
無花果の木がある
秋のはじめで実がなっている
しかし見ているのは
庭ではない
庭とぼくとの間の
カーテンのような透明な仕切り
の中を見ている

ぼくがこしらえた
自分だけの空間
を見ている
そこには何もない
大人になつて
働いているから
今日やるべきことがあつて
いやなことあつて
なんだか忙しくて
こんなことのために生きているん
じゃないと
数十年も思いつづけている

本当はやるべきことなどないのだ
幼いころの自分に還つて
ぼんやり
自分が作った空間をながめる
そこに浮かんでくるのは
夏祭の屋台の金魚だろうか
それとも初めて手をつないだ
あの子の汗ばむ掌だろうか

何もないのに
何かが現れてくる
幻がぼくなのか
ぼくが幻なのか

妻に

殿岡 秀秋

妻が孫の顔を見に泊まりに行つた晩
ぼくは真夜中に目覚めた
喉が渴いているわけではない
トイレに行きたいわけでもない
なんで目覚めたのだろう

ふと隣を見た

そうなのか

きみがいないから

なんとなく目覚めたのだ

いつもは

テレビを観ているきみより先に寝て

朝まで眠る

とくに気にしていなかったが

きみがひとつ屋根の下で

息をしている安心感で

ぐっすり寝ていられたのだ

きみがいつ寝たか

気づかないまま

真綿の柔らかい布団のように

そばにいてくれるだけで

包まれて

ぼくは眠っていたのだ

旅に出た三人

殿岡 秀秋

準備はたのしいが心配もある

宿舎に電話する

髭剃りはありますか

子どものパジャマはありますか

乗り継ぎ時間が六分と短い

乗り換える列車のホームを

確認しておこう

孫がまだ小さいから

事故がないように

気を配らなければならない

出発の日を迎えて

列車を乗り継いで

S L 列車の始発駅に着く

孫が機関車にカメラを向ける

車輪から煙突まで何枚も撮る

これから運転するような顔をして

孫が列車に乗りこむ

汽笛を鳴らして S L が出発する

開けた窓から煙りがまいこむ

孫が煙たそうに手を顔の前で振る

列車の窓から顔を出して

カーブにそって曲がる機関車が

煙りを吐く姿を

目に保存した幼い日のぼくと

長い時間停車する駅で

車内をかけていつてホームに出て

カメラに黒い車体を写し

あわてて戻ってくる

孫の姿が重なる

宿舎で温泉にはいる

翌日は新幹線の新車両に孫を乗せて

親元に送り届ける

駅の改札で

待っている親に孫を渡すと

ぼくらの旅は終る

楽しんだのは孫だろうか

ぼくなのだらうか

それとも

遠くなる機関車に向かつて
いつまでも手を振る
幼い日の
ぼくだったのだろうか

夢の続き

殿岡 秀秋

夢で大人にお辞儀する子ども
互いに正座している
どこの子だろうか
黙ったままうつむいている
何のために向きあっているかもわ
らない
目覚めが近づいて
シルエットがゆれだす

夢の白い網に
昔観た時代劇映画で
武将にお辞儀する子どもが浮かびあ
がる
楠木正成の子別れの場だ
やがてその子正行（まさつら）が若

武者になる
父と同じように負けるとわかってい
る
合戦に出て
兜がとれて
髪振り乱して闘う

夢の網が

記憶の海から
難波船の船首像を引っ掛けるように
釣り上げた

緋緘の鎧の若武者は
目覚めても
臉の裏で戦っている

その日観たことは
夜のうちに忘却の川から
記憶の海に流れていくのか
夢の網が
昨日の出来事にふさわしいものを
海の中から引き上げて
明け方の夢にしたのかもしれない

若武者は何のために戦うのか
ぼくの日常も闘いのようだ
負けるかもしれないけれど
出かけるために起きあがる

水たまり

殿岡 秀秋

雨の朝
小学校に向かう道
長靴で水たまりに入って
退屈をけとばす

一瞬
水滴が空にむかって
飛んだのを見た
気がした

一緒に何かが
地上の繋ぎを解かれた
風船のように
ぼくから離れていった

水しぶきがはねて
額を濡らした
ハンカチで夢の残骸を
ふきとる

水たまりの中に
白い馬車が現れ
扉があいて
ぼくが乗るのを待っている

箱詰め電車

殿岡 秀秋

駅でたくさんの人が下りたあとの座
席に
包みが置かれている
忘れ物だ
ぼくはあわてて取って
フォームを歩いて
事務室にいつて
遺失物の届出をしようとしたのだが
形のあるものでないと受け取れない
と駅員はいう

受け取ってもらえない
包みをもったまま
ぼくはフォームに佇んでいる
電車は人の数だけ悩みを運んでくる

路に記憶がある

殿岡 秀秋

小路の角を曲がると
家並みの
屋根の傾きの下で
格子戸が眼をつむっている
晴れても明るくならない
印画の街
軒と軒とが接するように
建てこんでいる
植物は軒下におかれた
盆栽やプランターにあるだけ
小路を奥に進むと壁につきあたり
どこにも抜けることができない

小路の角まで戻り
駄菓子屋のショーケースに
ぼくの顔を映す
飴をくるむ包装紙にかざられる
その唇がかすかに動く
これからの路を
どこへ向かって進めばいいのか
尋ねている

記憶の顔が眼を開く
やつとここまで来たんだね
これからは好きな路を
歩みなさい
見たことがある路の両側の
どこか懐かしい傾き
かくれんぼの鬼が
ぼくを見つけられないまま
帰ってしまったのを知らずに
隠れていた扉の裏で
夕暮れに上着をかけられる